

佐藤春夫における文明批評の方法

——「魔鳥」論——

朱 衛 紅

一、「魔鳥」と『台湾蕃族志』

佐藤春夫は大正九年六月に、小田原事件で極度に神経が衰弱し、同郷の友人の薦めにより、台湾と中国大陸福建に旅行に出かけた。この台湾、福建旅行の体験をもとに、その後佐藤は十篇近くの小説・紀行文・小品などを発表している。例えば大正一〇年に発表された、大陸旅行中の見聞を題材とした「星」、¹「南方紀行」²等が挙げられるであろう。加えて台湾を取材して執筆した作品は大正一二年一〇月に「魔鳥」³（『中央公論』）や、大正一四年の三月に「霧社」⁴（『改造』）などといった台湾ものがあり、昭和一一年七月にはさらに回想記「かの一夏の記」⁵が発表された。

台湾を題材にした作品のうち、発表時期がもっとも早かった「魔鳥」は、講談社版『佐藤春夫全集』の「校註」（牛山百合子）によれば、『台湾蕃族志』の第五篇「信仰及心的状態」を参照したのではないかと指摘されている。

この『台湾蕃族志』の著者は森丑之助（字丙午）である。彼

は当時台北博物館の館長代理であり、台湾蕃族研究の権威であった。森は明治二八年陸軍付きの通訳として台湾に渡り、その後未踏の山地に興味を示し、各地で探検を行なう。明治三三年、鳥居龍藏の台湾調査の助手を務めるが、彼はそれを契機に人類学の調査・研究に目覚めた。その後森は『台湾蕃族志』のほかに、『台湾蕃族図譜』全二巻⁶を著している。大正一二年、森は台湾総督府の政策に不満を持ち、館長の職を辞して日本に戻ったが、大正一五年六月三〇日、内台航路中に海に身を投じて、みずからの人生に幕を閉じた。⁷

台湾旅行当時佐藤春夫は、森丑之助の世話になっていた。森の提案で佐藤が福建に二週間ほど渡ったり、その後森の宅に滞在したりして、また森を介して台湾総督府民政長官（下村宏）⁸からの便宜を得て、台湾原住民タイヤル族の居住地域、霧社に入山した。⁹佐藤が後にそれらのことについて、「打狗滞在中、台北の丙午先生が再三下さった懇書は、最も短時日に台湾の見るべきところを尽くさせてやらうといふ親切の溢れたものであった」と感謝の気持ちを込めて回想している。また旅行中佐藤は森から『台湾蕃族志』と『台湾蕃族図譜』¹⁰を貰い、読んでい

たという〔霧社〕。

この『台湾蕃族誌』は、人類学の観点から台湾原住民を研究したが、本来は日本植民地政策のために制作されたものであつた。森丑之助が『台湾蕃族志』で、原住民研究の目的を、

彼等の習慣なり其民族性心理なり、彼等の夫れに對する感情や思想を十分調べ、または之を研究して（中略）相互に意志の疏通が出来れば、彼等生蕃の領土とせる蕃地に隘勇隊の前進なり、道路の開鑿なり、蕃地の利用なり（中略）同じく多少の犠牲を払つて目的を達する者にしても其犠牲の幾分なりとも減ずる事が出来得やうと云ふ自信を私は有つております

と説明している。後半は確かに植民地政策にかなう研究であることを表明しているが、前半には優劣の価値観を持つことななく、『民族性心理』を研究するといった、学問的態度が貫かれていることが注目される。森の「蕃人と雖も同じく人間であります等しく感情の動物であります（中略）真理に至りましては野蠻人も文明人も共通のものであつて、複雑なる文明人の社会よりは偽善や不義や虚飾は野蠻人の内にも返つて分量が乏しいのであります」という見識は原始人の文化を理解するまなざしを示唆している。佐藤がこの森の人類学者としての姿勢に深く共鳴していた。彼はのちに

氏は隠れたる好學の士であると同時に探検的の实地踏査者

で、この島の蕃山を氏ほど深く探つた人はないと言はれてゐるが、驚くべく敬ふべき事には氏はその踏査の間終始身には寸鉄をさへ帯びなかつたといふ事である。（中略）蕃人たちは日本の酋長であらうと噂されてゐるといふ人であつた〔霧社〕。

と回想している。このように、佐藤は台湾原住民に関して森丑之助から多くの教示を受けたと思われるが、『魔鳥』の執筆に當つて、原始人のまなざしの獲得が大きな示唆を与えたと考えらる。

二 少女ピラの話

さて「魔鳥」は、語り手の「私」が旅行中の「蕃地」で以下の噂話を聞かされたところから始まっている。

「蕃人」の少女ピラは年頃なのに、顔に刺青をすることを拒む。そして彼女の家族は、父のサッサンを始め、みんな地面を見つめて歩く癖がある。人で行き違ふ時に慌てて目を上げるがすぐにまた目を逸らしてしまう。このような異質な行為によつて、種族のものはサッサンの家の者を魔鳥使いと思ふようになっていく。その頃「ある文明国」の軍隊が、「蕃地」を縦断する強行軍を行つてゐた。強行軍の通り道になつた「蕃社」では、どんなに少なくとも三人や五人は犠牲になつたため、「蕃人」らは、自分たちの種族へ降りかかつたその災難を見て、それにはきつと魔鳥使いの呪術があるに相違ないと考える。

それなのに、ピラはその軍隊の後について歩いて歩いていると噂する者がいた。中にはピラがその軍隊の兵卒に犯されたのだという者もいた。その噂のためか、「蕃社」の者の多くは、ピラの一家を「魔鳥使い」だと思ひ込むようになり、そして彼らを探し殺していく。

このプロットの素材はなにかという点で注目されるのは台湾タイヤル族の迷信を記した『台湾蕃族志』の「信仰及心的状態」についての森の記述である。

蕃人は物質的開化の程度極めて低き為め、彼等現代の智識に於て理解し難きもの及超自然の事物に対する一種の信仰ありて、敬虔の態度を以て神聖視し或は恐怖と嫌悪の情を以て悪魔視するものとあり、都て吾人の目して迷信とするものなれども、彼らの信仰は殆ど一遺伝的に根深き信念を有し：

というように記し、そしてその中の「悪魔視」に関連して、

蕃人の伝説にハウネと称する魔鳥があり、(中略)蕃人は此鳥を目撃すれば必ず死すべしと伝へ、且この魔鳥を使嶽(そう)するとの嫌疑を受くれば一族暗殺さるゝことあり、(中略)彼等の社会に在りては是等公益の為め其者殺害せしは、即ち魔性を退治せしものにして其行為を偉とし之を正当と認むる：

と記している。ただ森丑之助によると、魔鳥或は魔鳥使いの妖術者が実在することはなく、「蕃人」の古来の伝説による迷信に過ぎないにもかかわらず、その迷信は「蕃人」の間に大きな力をもっていると指摘している。佐藤春夫はこれらの記述を参照しながら少女の話を構成したと考えられよう。

作品では、少女をめぐる噂話と交錯し、「私」の旅行そのものも語られている。

その地方の蕃人の事情が特別に不穏でない限りは大した不安なしに、この珍しい景色を見ることが出来るのである。それにその地方の蕃人は古来から蕃人のうちでは温和な習慣を持つてゐるさうであるし、殊に私が旅行した時の如きは特別に我々の民族に好意を示してゐると言はれてゐると時でもあつたし、私は敢えてその景色を見て置かうといふ氣になつたのであつた。(中略)しかし蕃情といふものは全く予想しがたいもので、聞けば、その地方も最近——私がこれを書く今日では、為政者のちよつとした見込み違ひから、我々同族に対しては大へんな反感を抱いてゐるとかで、もしさうだとすれば、私はちやうどいい機会にあの景色を見て来たことになる。

佐藤春夫が霧社を訪れたのは九月二二日であつたが、その四日前の九月一八日、日本の殖民地政策に不満を持っていたタイヤル族サラマオ原住民が反乱を起こしていた。当時霧社の付近

はサラマオ原住民を鎮圧するための軍隊が到着し、不穏な状況であった。このことは「私」が「為政者のちよつとした見込み違ひから、我々同族に対しては大へんな反感を抱いてゐる」と語るのにおおまかに符合している。

しかし、作品上では「蕃情不穩」という風聞を耳にしたのは旅行後だとし、時制のズレが生じている。これはおそらく、検閲に対する警戒であろう。佐藤は旅行中の体験で、台湾原住民は温和であると感じ、日本人のタイヤル族に対するステレオタイプな見方に疑問を持っていたため、反乱後の不穏な状況の中であえて霧社に入山したと言えよう。

既に指摘されているように、自立的な台湾原住民グループをはじめて支配した外来者は、日清戦争後に台湾の植民地統治(明二七〇昭二〇)を推し進めた日本人であった。当時タイヤル族は植民地統治に対して激しい抵抗を行った。それに対し植民地統治者側はタイヤル族には魔鳥使いや首狩り等の風習があることを理由に野蛮な民族とみなし、彼らに対して高圧的な理蕃政策を行なった。しかし、森の原始人を対等視するまなざしからすれば、野蛮のゆえに「理蕃」するというのは植民地統治者が己の政策を正当化する口実でしかなかったということができ。サラマオ原住民の反乱についても、森丑之助は佐久間総督の高圧政策に起因すると、佐藤に語っている。

こうしたところから、「魔鳥」の中の文明国の軍隊は佐久間総督の強行軍を暗示し、「私」という人物には作者自身が投影されていると思われる。このように、作品の中で「蕃人」の噂話という形で、佐久間総督の強行軍の非行は赤裸々に語られている。

三 魔鳥使いをめぐる「私」の思考

「魔鳥」は少女ピラの話を採話するだけで止まるものではない。語り手の「私」が少女の話の聴き、ショックを受け、「蕃人」の迷信を考えてみたという展開である。作品の構成は少女の話が独立した部分として中間にあり、「私」の思考が前半と終わりの部分にあるという入れ子構造になっている。

少女の話は魔鳥使い狩りの一例として、そのプロセスを具体的に再現しているが、それは植民地化過程の中で起こった出来事であったため、前述したように植民地政策の暴露にもなっている。それに対し、「私」の思考の記述は魔鳥使いという迷信における一般的メカニズムの分析に重心をおいている。

魔鳥使ひであることはたゞ人ひとりではなく、一家族の無残な死を意味してゐるのである——然も、この蛮族は異常に家族を愛する種族である。かういふ危険を冒してまで、人はどうして魔鳥使ひなどになるのであらうか。(中略)魔鳥があり、また魔鳥使ひのやうなそんな途方もない能力を自然が人間に与へるものかどうかといふことだけは、いふまでもなく考へ得られないことである。(中略)要するに、仲間の者が魔鳥使ひに仕上げてしまふのだ。皆でさう認めてしまうのだ。その外に何の証拠もあるわけではない。(中略)彼等が人を魔鳥使ひではないかと疑ひ出す最初の動機は、その疑はれる人間が殆んど全ての場合、

前にも述べたやうに、いかにも怏々^{ちやう}として不安げな表情を長い事持ちつづけてゐて、その理由が他の人々に決してわからないことに起因するらしい。私はこの点に就てこの迷信に富んだ暗示を見るのである。

魔鳥使いは本来存在していない。異質なものに対する恐れから生まれたものである。『台湾蕃族志』では「魔鳥使い」にされた例として、他種族と結婚した女が嫁に行つたその種族で「魔鳥使い」にされたという事例を挙げているが、この「魔鳥」では魔鳥使いだとみなされやすい理由のほとんどすべての場合が「不安げな表情」であると「私」は指摘する。ではこの不安げな表情とは何を意味しているのだろうか。

一体、この上もなく簡単な野蛮人の原始的な生活のなかには、当然のこととして、それほど深い憂鬱といふものはあり得ないものでらう。もしあるとすれば、病氣などのごとく肉体の苦痛が重なるもので、これは一見して誰にでも会得出来るものである。外にまた例へば他種族との間の不和といふやうな社会人としての彼等の憂愁もあるに違ひない。けれどもこれは一般共通のものである。それ故に前述のものとその類を全く異にした個人的の憂悶で、しかもそれは他人に打解けて説くことも出来ないやうなものを霊に抱いてゐるとしたら、これは成程考へ方に依つては、その理由の何なるかを問はずその事自体はすでに一つの重大な罪悪になると言へるかも知れない。憂鬱なる霊を悪とす

るところの準拠は、實際成り立たない事はないのである。さうして種族の精神のなかにそのやうな不透明なもの影を絶対的に滅却しようとするとはいいいいことであるかも知れない

ここでは「不安げな表情」が「個人的の憂悶」と言い換えられている。なるほど簡単な原始人の生活のなかには深い憂鬱というものはあり得ないだらう。ピラの場合、それは彼女が少女から成人女性へと変わる肉体的精神的転換期のそれであり、さらには彼女が一兵卒に犯されたことからの憂悶でもあらう。特に兵卒に犯されたことは、日常性に基ついて作り上げられた少女の自己同一性を動揺させ、混乱させたに違ひない。刺青をしない行為はまさしく少女のアイデンティティの不安定さを意味しているであつて、それが「不安げな表情」に暗示されている。とすれば、「不安げな表情」は自我の萌芽と呼ぶことができる。原始人の刺青について、レヴィー・ストロースはこう言っている。「原住民の思考のなかでは、装飾は顔なのであり、むしろ装飾が顔を創つたのである。顔にその社会的存在、人間的尊嚴、精神的意義を与えるのは、装飾なのである」¹⁰。種族の人たちは少女の「不安げな表情」を解釈することができず、彼女を「魔鳥使い」にしてしまふ。種族という共同体の精神構造の中にそのような不透明なものの影を絶対に許さない何かがあるからである。それは万一悪霊がその人にとり憑いて、そして種族の中へと伝染すると、大変なことになるといふ考である。要するに種族の精神の中で「不安げな表情」——「不透明なもの影」

が部落の秩序を危機におちいらせる危険なものと考えられている。「迷信」とは種族の信仰であり、世界観の表現なのである。

ピラはその後、例の軍隊の兵卒に犯されたことを打ち明け、魔鳥使ではないことが証明され、命だけは助けられた。その代りにそのような「不浄」を永いこと隠し、部落内を騒がせたということで、部落から追放されてしまう。「そういう女を部落の中に置くことは蕃人の社会では赦され難いことだからである」「(魔鳥)と「私」は解釈する。

「不浄」とは、「台湾蕃族志」によれば、「一度他種族の民と通じまたは嫁せし婦人は不浄として蕃人と絶対に再婚することを得ず」と書かれている。人類学によれば、カオスの侵入によってコスモスが壊されると考えるのが一般的な世界観だとされている。種族の人たちの考えはまさしくこうした論理に叶つているといつてよい。少女ピラが外来軍隊に犯されたということはカオスを侵入させたことになり、そのために「不浄」と思われたのである。

「魔鳥使い」とか「不浄」といつた「蕃人」の迷信は、悪靈その他の悪しき存在の侵入を防ぐための装置なのである。語手の「私」は原始人の認識の奥にある心理、というよりも意味体系を見出していることに注目したい。

四 文明人のなかの魔鳥使い——「魔鳥」の発表時期に 関連して

事の是非は論決出来ないまでも要するに、彼らは自分達

の大多数と表情の違ったところの人間を滅亡させようとするのである。(中略)さうだ。それは無法でないこともない。けれども注意すべき点は、この無法は決して彼等所謂野蛮人だけに特有なものではなく、全くその通りのことが所謂文明人のなかにもそつくり行はれてゐるといふ一事である。

大多数の人とは表情の違った人間を「魔鳥使い」として、殺したり追放したりすることはもちろん「無法」を行ないである。しかしそれは文明人の中でも行われている。ただ原始人の社会では、外部からは「迷信」といわれるような非合理の信仰という体裁をとりがちだが、文明社会ではその心理は道徳や正義などといわれる形で現れている。これが「私」の考えである。こうして「私」のまなざしは文明社会に向けられていく。

文明人が見て野蛮人の風俗習慣のなかにたくさんの迷信があると思ふやうに、野蛮人が見たら文明人の社会的生存の約束のなかにそれこそ多数の迷信を発見するだろう。——我々が道徳だと思つたり正義だと考へたりしてゐることでさへも、彼等野蛮人はひよつとすると迷信だと考へないとは限らない。ちやうど我々が野蛮人の道徳や人道を迷信だと思ふのと同じことだ。

ここで注目すべきは、「私」のまなざしにおいて文明人と「野蛮人」の立場が反転させられ、文明人の正義と道徳が相対化さ

れていることである。それは作者が原始人のまなざしを獲得しているからである。

周知のように佐藤春夫は以前から武者小路実篤が代表する白樺派のヒューマニズムに共鳴している。しかし、貧困階級に対する富者の同情、人間性の全面的信頼と肯定という白樺派のヒューマニズムに対し、「私」はむしろ「蕃人」の魔鳥使いの話から、人類にある異端・異常なものを排除するという心理を見出すことで、文明社会そのものを相対化している。このような佐藤のヒューマニズムをこの作品の文明社会のとらえ方にのみてみよう。

「私」は文明人の中にも見られる魔鳥使いの例を思い出して、次のようにいう。

私は或る文明国の政府が、当時の一般国民の常識とややその趣を異にした思想——それによつて一般人類がもつと幸福に成り得るといふ或る思想を抱いてゐた人々を引き捉へて、それを危険なる思想と認めて、屢々その種の思想家を牢屋に入れ、時にはどんな死刑にしたのを見聞したことももある。文明人たちも亦、野蛮人たちと同じく、自分たちの理解しないものを悉く悪と決定し去つて、その不可解な表情——霊の表情を持つてゐる人を根絶することに努力する。——文明人のなかにも亦、「魔鳥使い」と認められた人々は多数にある。だが、私は今文明人の話をしようとしてゐるのではなかつた。

「私」は「蕃地」にみる異端・異常なものを排除していく社会構造を、同じように文明国の中にも見ている。「私は今文明人の話をしようとしてゐるのではなかつた」という一言は、逆に文明人の話を強調する効果さえ果たしている。「ある思想を抱いていた人々」というくだりについては黒川劔^①が指摘しているように、佐藤は「大逆事件」を念頭においてこの部分を書いただろう。

「一般国民の常識」と「その趣を異に」している異端・異常な「思想家」を、「文明国政府」が「牢屋に入れ」「死刑にした」。いわば国家という共同体からの排除ということになろう。ここで注意すべきは、作者が問題の主体を意図的に隠蔽していることである。「蕃社」の少女ピラの話が並列させられていた意味がここにある。つまり、文明人といえども、心の奥に確かに異端・異常を排除していく志向がある。その集団心理が時には権力に利用されたりもする。まさに少女の話は権力の問題ではなく、「蕃人」という群集にある集団心理の問題である。そしてそれは、流言蜚語という形で表れている。佐藤がとらえるのは、現代的な社会の狂気の問題であつて、それが集団心理の爆発に認められるとするとところに強いて置かれている。この作品では情報化社会における隠れた権力と集団心理の關係が巧みに描かれているというべきだろう。

大正一二年九月一日の関東大震災で六万人近くが死亡、東京市の三分の二ぐらいが焼きつくされ、流言蜚語が乱れ飛んで、不安と恐怖の日が続いていた。その後市民の手で六千人以上の朝鮮人が虐殺された（朝鮮人狩り）。混乱に乗じて、市沢計七

ら社会主義者が習志野騎兵隊の兵士によつて殺害され、そして九月一六日に社会主義者・アナキスト大杉栄と伊藤野枝、甥の橘宗一が憲兵大尉甘粕正彦とその部下によつて殺害された。

当時、大杉栄の暗殺者甘粕大尉の裁判に関する第一師団軍法会議警察官談が各新聞紙に掲載されていた。

甘粕憲兵は本月十六日夜大杉外二名の者を某所に同行しこれを死に致したり、右犯行の動機は甘粕大尉が平素より社会主義者の行動を国家に有害なりと思惟しありたる折柄今回の大震災に際して無政府主義者の巨額たる大杉栄等が震災後秩序未だ整はざるに乗じ如何なる不逞行爲に出づるやも測り難きを憂ひ自ら国家の蠱毒を芟除せんとしたるに在るものゝ如し。

社会主義者の虐殺、朝鮮人虐殺は大逆事件のような権力の暴力性というよりも、異端・異質なものを排除するという群集の心理に付け込んだ大衆操作の結果であつた。近代社会にあつて権力は間接的となり、それだけ「隠れた」存在となつているが、佐藤はそれを見抜いていたともいへよう。この群集心理を誘導する権力のメカニズムはいわば、下からのファシズムの可能性を示すものであつた。その後こうした行爲は「自ら国家の蠱毒を芟除せんとしたるに在るものゝ如し」というように正当化され、その責任を不問に付してしまつた。

「魔鳥」がこの時期に発表された理由はこうした社会状況にあるだろう。「魔鳥」は翌一三年一月、短編集『美人』に収録さ

れ、単行本として刊行されているが、そこで、「魔鳥」にだけ、初出掲載時になつた年記（大正十二年十月作）を作品末尾に追記されていた。作者がこれによつて関東大震災の記憶を讀者に蘇らせようとしたのである。

五 魔鳥使いへの眼差し

すべての悪を伝統的で神秘的なところから来るものと考へるこの彼等の心持は案外に暗示的でない事もない。また超自然でそれがしかも自分にだけ特別に持つことの出来るある力が若しあつたと仮定して見ると、我々は実際、その前には悪善の判断や至高の犠牲などを忘れてその奇異な能力を得られることの誘惑に身を投ずるかも知れない。これは考え得ることだ。人間のなかには確かにそのやうな性質がひそんでゐる。それを多量に具えた人間もある。

「私」の考えは社会的正義を指向する善悪の判断から自己を切り離し、自己の信ずる価値観の独立を求める反通俗的なものである。大正期の芸術至上主義もこのやうなものである。ピラの話という仕組みは、文学をもつて、社会に対する自己のアクチュアリティを示している。

『台湾蕃族志』によれば、ピラのように「不浄」の罪があるとされた人は、死んだ後「虹の橋」を渡つて、先祖がいる天国に行くことが出来ないとされている。しかし、「魔鳥」では、ピラと弟コーレは部落から追放され、ピラは森の中で蛇に噛ま

れ死んでしまう。そのとき天の上に美しい虹が現れたと書かれています。作者はピラのような「蕃地」でもっとも疎外された人々に目を向け、同情を寄せていた。「魔鳥」の結末では、コーレも他種族の首狩りにあつて殺されてしまう。

……きつと裸で、さうして首のない小さな屍がひっそりとしたところへ残されてゐたであらう。(中略) 私は蛮人たちの話を聞きながらその屍がそんなふうには横たはつてゐたといふ場所を、私たちが今行かうと目差してゐるその並はづれた風景のある場所を空想してゐたが、やがて歩きつづけて行くうちに、私は蛮人の社会にもあるところのさまざまの迷信に就てまた文明人の迷信に就て、何か考へて見たのであつた——それはこの文章の前半に書いたとほりのことである。

首のない屍という身体のイメージは抑圧され、抹殺されたグロテスクなものを意味し、大逆事件で絞首刑にされた思想家の死体の残像でもあらう。そのグロテスクな場所へ歩き続ける「私」の姿に、作者の漂泊する魂が感じられるのではなからうか。

佐藤春夫は台湾原住民の社会に関して森丑之助から多くの教示を受けた。彼が森から学んだのは原始人のまなざしを獲得したことであつた。「魔鳥」のなかで、佐藤はそのまなざしで台湾原住民社会の排除の構造を見出すと同時に、そのまなざしを彼の文明社会に反転させ、文明批評を行う鋭い方法として用い

たのである。

【注】

- (1) 臨時臺灣舊慣調査會 大四・三
- (2) 日本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究概覽——日本からの視点——』平一三・二
- (3) 臺灣舊慣調査會 大二・八
- (4) 尾崎秀樹「佐藤春夫と中国」『近代文学の傷痕・旧植民地文学論』岩波書店 平三、島田謹二「佐藤春夫『女誠扇綺譚』『台湾時報』昭一四・九
- (5) 蜂矢宣朗「霧社」『覺書——佐藤春夫と台湾——』『天理大学学報』一九七三年三月
- (6) 「かの一夏の記」、引用は講談社『佐藤春夫全集』により、又引用の表記については、旧漢字は新漢字に改めた。以下「霧社」と「魔鳥」の引用も同様。
- (7) 引用は『台湾蕃族志』の巻末にある「附録台湾蕃族に就いて」により。「附録台湾蕃族に就いて」には大正二年六月台湾博物学会での森の講演記録がつけられている。森の調査の動機・経緯や、台湾民族分類の根拠、原住民観を述べている。
- (8) 首狩りについて、『台湾蕃族志』はこう説明している。「旧観によれば本族の男子は首狩りに赴き、人頭を誅せし者にあらざれば成年の伍に列することを得ず、従て蕃人としての人格を其社会より認められず、假令年齢が長ぜるも正則の刺青を顔面に施すの資格なし……」蕃人の首狩とは敵蕃又は異種族の首級を誅首するの行為を称するものとして、その目的は単純にして敵の首級を得るに在りて敵勢と戦ひ之を撃滅し或は敵対の勢力を殺ぐ為めに行ふものに非るなり況や敵地を侵略し或は敵の財貨を略奪せんが為めに行ふもの非るなり」
- (9) 「霧社」はサラマオ原住民反乱後の霧社あたりの状況などを題材としているが、その結末には、このような個所がある。
サラマオの事件に対しては氏は「森丑之助——筆者多く言はな

つた。たゞその起因は、十年の昔、佐久間総督が軍隊をして全島の蕃地を縦断的に強行軍を試みさせた時に遡らなければその真相を得ることは不可能である。佐久間閣下は理蕃に就て極力高压的手段を惜まなかつたが、M氏自身は当時から既にその可否を疑つてゐた。(中略) M氏はその一語で一大事を予想することが出来たといふ。

(10) レヴィルストロース「アジアとアフリカの芸術における圖像表現の分割性」『構造人類学』荒川幾男他訳　みすず書房　昭五四・一

(11) 黒川創『国境』メタローグ　平一〇・二一

(12) 大逆事件の時、新宮出身の大石誠之助は部落差別問題に疑問をもつたことから社会主義者と交流し、事件への連座につながつた。佐藤は大石の死を悼んで詩「愚者の死」を『スバル』(明四四・三)に発表するなど、当時としてはもつとも激しい体制批判を行なつた。

(13) 大杉栄は大逆事件の時に、獄中にいたため連座を免れ、出獄後、大正元年一〇月『近代思想』を創刊した。大杉は、「自我の確立」は必然的に現存社会にたいする「叛逆」に帰結せざるを得ないと主張している。

(14) 『中央公論』大正二二年一〇月号に、里見淳の「噂する本能」という記事も掲載されているが、そこで里見は流言蜚語の社会状況を批判している。その中に警察談を引用しながら、大杉栄の死を追悼する一節があつた。

(シユ　エイコウ　筑波大学大学院博士課程
文芸・言語研究科　文学)